

二〇二三年度

日本近世文学会春季大会

- ・大会プログラム
- ・研究発表要旨
- ・シンポジウム要旨

期日 六月三日(土)・四日(日)・五日(月)
会場 日本女子大学目白キャンパス成瀬記念講堂

〒112-8681 東京都文京区目白台二一八一

- 一、参加申込および参加費の支払いは、Pactixもしくは同封の振替用紙(口座番号〇〇一六〇一―一〇二八二三 口座名「日本近世文学会」)にて、五月十二日(金)までにおこなってください(Pactixからの申込は十三時締切)。
- 二、大会経費は、参加費千円、懇親会費五千円(飲酒をされない方は四千円)です。出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(早稲田大学)へお申し出ください。
- 三、大会経費をPactixからお支払いの場合は、システム上で領収書の発行が可能です。振替用紙にてお支払いの方、学会印入りの領収書が必要な方は、会場受付にて発行いたします。可能な限り、事前に学会事務局(早稲田大学)へお申し出ください。
- 四、二日目(六月四日)は、千円にて昼食(弁当)を提供します。希望者は学会参加申込と併せてPactixもしくは振替用紙にてお申込みください。
- 五、研究発表・シンポジウム会場の成瀬記念講堂は、文京区の重要文化財のため、飲食禁止です。飲食の際は控室をご利用ください。また、隣隣には飲食店が少ないのでお気をつけください。
- 六、研究発表会・シンポジウムにご参加の方には、受付で資料集(冊子)をお渡しします。大会に不参加で資料集の郵送を希望する場合は、郵送会員は同封の振替用紙で千円をご送金ください。メール会員の方は、事務局(早稲田大学)までメールでお問い合わせください。資料集請求希望の締切は、五月十二日(金)とします。資料集の発送は、大会終了後におこないます。
- 七、三日目(六月五日)の展覧会会場までは、各自でお越しください。参加には事前の申込が必要です。学会参加申込と併せて、Pactixもしくは振替用紙にてお申込みください。
- 八、同封の振替用紙による年会費の振込はできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
- 九、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一〇、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。
- 一一、お急ぎの御用は左記へご連絡ください。

日本近世文学会春季日本女子大学大会実行組織
日本女子大学文学部文学部日本文学科 福田安典研究室
〒112-8681 東京都文京区目白台二一八一
メールアドレス fukuda@ic.jwu.ac.jp

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。
さて、二〇二三年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇二三年四月二十二日

大会プログラム

【会場】日本女子大学目白キャンパス

【行事】

第一日 六月三日(土)

委員会 (一一・四〇～一三・〇〇)

委員会会場 百年館五階 五〇二・五〇三会議室

大会受付 (一二・五〇)

開会時間 (一三・二〇)

研究発表会 (一三・三〇～一六・〇〇)

研究発表会会場 成瀬記念講堂

1 陶弘景と孫思邈 —— 『戒殺物語・放生物語』と善書をめぐって——

早稲田大学(院) 伊 丹

2 近世玉藻前説話における『勸化白狐通』の位置
—— 先行狐譚の継承と発展に着目して——

早稲田大学招聘研究員 馮 超 鴻

3 和刻本『笑府』三種の比較をめぐって —— 藪医者の笑話を中心に——

中国人民大学外国語学院(院) 栗 野 友 絵

4 江戸の病気見舞い本にみる疱瘡神と麻疹神
—— 歌川国芳「鎮西八郎為朝・疱瘡神」図を視野に——

慶應義塾大学 津 田 眞 弓

日本近世文学会賞授賞式・総会 (一六・一〇～一七・三〇)

懇親会 (一八・〇〇～二〇・〇〇)

懇親会会場 七十年館一階

日本近世文学会春季大会会場校代表 福田 安 典
日本近世文学会事務局代表 池 澤 一 郎

〔日本近世文学会事務局〕

早稲田大学文学学術院 池澤一郎研究室

〒162-8644 東京都新宿区戸山二-24-1

電話 〇三-五二八六-三七二一(呼出)

メールアドレス info@kinseibungakukai.com

第二日 六月四日(日)

大会 受付(九・三〇)

研究発表会 (一〇・〇〇)～(一一・三〇)

研究発表会会場 成瀬記念講堂

5 百首歌・題詠・画中歌・絵入本のT E Iマークアップの試み
——天和三年刊・菱川師宣画『絵入藤川百首』を例として——

国文学研究資料館特任助教

幾浦 裕之

6 『野ざらし紀行』画卷について

東洋文庫研究員

深沢 眞二

7 素龍関連の『奥の細道』写本をめぐって

中部大学

岡本 聡

8 『猿蓑』発句部の再検討

和洋女子大学

佐藤 勝明

昼 休 み (一二・三〇)～(一三・三〇)

編集委員会会場 百年館 二〇一教室

シンポジウム (一三・三〇)～(一六・〇〇)

シンポジウム会場 成瀬記念講堂

「没後二百年 大田南畝を語る」

《第1部》

寛政十一年の幕臣文化圏の一員としての大田南畝

——附・『ひともと草』伝未詳作者考——

旗本文人の領域——寛政二年の大田南畝

広島大学

久保田 啓一

《第2部》

上方から見た大田南畝

日本女子大学

福田 安典

石川淳の「おとしばなし」と南畝の戯作

立正大学(非)

宮内 淳子

デイスカッサント
司会

法政大学

小林 祐規子

白百合女子大学

宮本 祐規子

閉会 (一六・二〇)

第三日 六月五日(月)

展覧会特別公開

たばこ塩の博物館「没後200年 江戸の知の巨星 大田南畝の世界」

学会員限定で無料公開を行います。時間内に各自でご見学ください(十四時は閉館の時刻です。余裕を持ってご来場ください)。

見学希望者は、必ず大会参加申し込みと併せてPeatixまたは振替用紙にてお申し込みください。

展覧会の内容については、たばこ塩の博物館ウェブサイト(<http://www.tabashio.jp>)をご覧ください。

なお、特別公開についてのお問い合わせは学会事務局へお願い致します。

研究発表要旨

陶弘景と孫思邈

——『戒殺物語・放生物語』と善書をめぐって——

早稲田大学（院） 伊 丹

陶弘景とうこうけいと孫思邈そんしはくは、ともに中国の名医・道士で、医薬・博物学などに精通し、『本草経集注』や『千金方』などの医書をそれぞれ撰じた。この二人の中国名医の話は、『戒殺物語・放生物語』の巻四に収録されている。

『戒殺物語・放生物語』は寛文四年（一六六四）刊行の、浅井了意作とされる四巻の仮名草子である。その中において、孫思邈は、牧童から蛇を助け、薬を傷に塗って草に放つたため、竜宮に招かれて名方の伝授を受けた。また陶弘景は、先に天に昇った弟子桓闍かんがより、仙人になれない理由は、著書の本草経ほんそうきやうに魚・鳥・虫などの生類を薬としたためであつたと知らされ、草木に薬種を変えることで、仙術を悟つて天上にのぼつたとある。

陶弘景・孫思邈の逸話は、史書、医学書、類書などに多数あるものの、上述した話は、二人の伝記を収録した正史などには見られない。従来の研究では、『戒殺物語・放生物語』に収められているこの二人の名医の話は、明・株宏しゅこう『戒殺放生文』及び『太平広記』が出典、あるいは出典不明かともされているが、

まだ検討する余地が残されていると考える。本発表では、まず陶弘景・孫思邈に関する説話を整理し、その系譜を明らかにしたうえで、善書との関わりを明らかにする。また『戒殺物語・放生物語』における当該話に注目し、善書『迪吉録』との関係を描き方々、浅井了意と善書との関係などについても考察する。

近世玉藻前説話における『勸化白狐通』の位置

——先行狐譚の継承と発展に着目して——

早稲田大学招聘研究員 馮 超 鴻

玉藻前説話の発生は御伽草子「玉藻の草子」に遡るが、近世に至ると内容的にさらに変貌していく。近世のその作品群においては、『勸化白狐通』（僧草潮海誉著・明和三年（一七六六）刊）が、いわゆる承前啓後の重要な役割を果たしている。本発表では本作が如何に従来の狐譚を継承しつつ、新規に独自の発展を成し遂げたかについて考察したい。

物語の構造について、本作の著者は「玉藻の草子」を継承する一方、天竺部分の叙述を本朝部分とほぼ同量に増幅させ、三國物の重要な膨らみを試みる意欲を示す。また、登場人物にも「玉藻の草子」と異なる新たなイメージを付与する。具体的に

は『通俗武王軍談』や明代の小説集『狐媚叢談』の滋養を吸収し、玉藻前と安倍泰成との論争、及び術比べの話題を添加する。また、『簞簞抄』などを利用して斑足王の叙述に新味を加える。

近世の玉藻前説話の変容のプロセスにおいては、本作に現れた狐変妖婦の系譜の推移が重要な意味を持つ。「玉藻の草子」では妖狐が「塚の神↓褒姒↓玉藻前」の順に変転するが、本作では妹喜・妲己・花陽夫人を加え、「妹喜↓妲己↓花陽夫人↓褒姒↓玉藻前」の新たな系譜を創出する。本発表では、本作の著者が当時の妲己の話譚の流伝するなか、『通俗武王軍談』の影響を強く受け、褒姒・玉藻前に妹喜・妲己を連続させたと考察する。

和刻本『笑府』三種の比較をめぐって

——藪医者の笑話を中心に——

中国人民大学外国語学院（院） 栗 野 友 絵

京坂が中心であった咄本は、十八世紀後半には江戸に移って黄金期を迎えた。その背後にある中国笑話集『笑府』（馮夢竜編）およびその和刻本三種、すなわち和刻半紙本『笑府』（編者不明、一七六八年）、和刻小本『笑府初編』（懷懂齋主人訳、一七六八年）と和刻本『刪笑府』（風来山人編、一七七六年）に改めて注目したい。

中国笑話の和刻本が江戸の小咄や落語に刺激を与えたことは、石崎又造がいち早く注目し、『刪笑府』と平賀源内の関係も明らかにされつつあり、編者の施訓を通して『笑府』和刻本の特徴を述べた一連の川上陽介（『笑府』三種比較攷、一九九九年）をはじめ多くの先行研究がある。発表者も中国笑話が和刻本を通して漢文体笑話に翻案された表現の様に注目して論じた（『説話文学研究』五七号、二〇二三年）。

従来の研究では和刻小本と『刪笑府』との接点がないと論じられてきたが、藪医者の話題を収めた方術部は和刻本の間で唯一共通する部類である。従って、本発表では方術部を俎上にあげ、各編者の医学笑話への関心を考察し、中国の笑話がいかに日本の笑話を豊かにしたかを論じる。その結果、『刪笑府』では医療事故を扱った作品が見られず、他の二種に表された藪医者像と大いに異なることが分かった。他の二種は様々な藪医者の話を集めたため、後世に与えた影響が大きく、類話が多く産出されたことが明らかになった。

江戸の病気見舞い本にみる疱瘡神と麻疹神

——歌川国芳「鎮西八郎為朝・疱瘡神」図を視野に——

慶應義塾大学 津 田 眞 弓

うたがわくによし

歌川国芳「鎮西八郎為朝・疱瘡神」図（嘉永四年（一八五二）刊か、万屋吉兵衛板）には、源為朝と、その前に跪く老婆と赤い餅にかじりつく赤い頭巾に赤い着物の子供、擬人化された疱瘡関連の玩具たちが描かれる。疱瘡をめぐる日本の習俗や文化を広く伝えたH・O・ローテルムンド『疱瘡神』（二九九五年）の口絵に使われた疱瘡を巡る文化を象徴する一図で、おそらくこの書を起点に、老婆と赤い着物の子供を疱瘡神と見なす見解が民俗史・医学史・美術史でも見られ、一般にも流布している。しかし、花咲一男『疱瘡絵本集』（二九八一年）、板坂則子・高橋雅樹「疱瘡本小考」（『江戸の文事』所収、二〇〇〇年）に連なり疱瘡絵本を読み解くと、国芳のこの図は、疱瘡神の老婆と玩具たちが罹患した子供に付き添い、その健康と行く末を為朝に願う場面に見える。

本発表では、十返舎一九作・貞之画『疱瘡請合軽口噺』（享和三年（一八〇三）刊か、駿河屋半兵衛板）など紅摺の疱瘡絵本や、他領域では看過されてきた紅摺以外の見舞いに用いられたと思しい草双紙を踏まえ、疱瘡神や罹患した子供の姿を追う。これにより国芳図の解釈を訂正し、かつ見舞い本における麻疹神の

形成も確認する。青本『童麻疹の後』（鳥居清長画、奥村源六板、安永五年（一七七六）刊）で存在が否定される麻疹神の登場は、文政七年流行時の種々の戯作を待つことになる。

以上、病気見舞い絵本における疱瘡神を追い、医療の移り変わりによる人々の意識の変化や、棚橋正博『黄表紙総覧』後編（二九八九年）が言う疱瘡絵本と麻疹流行の関係の深さを看取りつつ、資料の残存が幕末に偏る疱瘡絵研究の知見を補いたい。

百首歌・題詠・画中歌・絵入本のT E Eマークアップの試み

——天和三年刊・菱川師宣画『絵入藤川百首』を例として——

国文学研究資料館特任助教 幾 浦 裕 之

定家作とも仮託ともいわれる『藤川百首』は多くの伝本と注釈がある。しかし検索できるのは御所本六家集『拾遺愚草』、『藤川五百首』、『続群書類従』のみで各伝本の研究も少ない。

本発表では、菱川師宣が個人の百首に歴史的歌意絵を付した唯一の作品である天和三年（一六八三）刊『絵入藤川百首』の国立国会図書館所蔵本をT E E Iガイドラインに拠って記述し、紙媒体やPDFとは異なる翻刻方法を提示する。T E E Iは人文学におけるデジタルテキストの各要素の意味を、機械が認識で

きるようにする方法を議論する協会であり、そこで制定された符号化^{ふごうか}のルールである。符号化とは、題名であれば△title▽藤川百首△title△のように、各要素の前後をタグという記号で囲み、資料の各情報の意味を示すことである。人間の視認性を保ちつつ、機械が分かる言語に古典と書誌学を翻訳することができる。

古典籍や本文をデジタル化することで、紙面の物理的制約にしばられず、古典籍が持つ豊富な情報と諸関係を省略することなく記述する。百首歌の構造や題詠表現、和歌と挿絵、参考歌や画中歌^{がちゅうか}、本文と書き入れなどの複合的な諸関係を、デジタル上で可視化する。中世的な題詠表現が絵入本となることで、題詠が実詠として表象されてゆくこと、さらに読者によって注が書き入れられてゆく、近世の複層的な古典享受を考察する。

本発表では日本古典籍の書誌、本文情報をデジタル化し、国際的に公開する上での可能性と、今後の課題について提示する。

『野ざらし紀行』画卷について

東洋文庫研究員 深 沢 眞 二

福田美術館新収蔵の『野ざらし紀行』芭蕉自画自筆本の東海道に属する絵は、元禄三年序・初刊の、遠近道印著、菱川吉兵衛師^{もろのぶ}宣画『東海道分間絵図』を粉本としてしていると見られる。写

真を示して絵の対応関係を指摘し、芭蕉が『野ざらし紀行』画卷でどこを何を描こうとしたか、新たに検討を加える。『野ざらし紀行』画卷二本（福田本・三康本）の成立時期には大きく分けて貞享後期説と元禄六年頃説があるが、粉本の存在によって、元禄三年より前の成立では有り得ないことを述べる。

また、二本の画卷にはそれぞれに素堂^{そどう}の文章が付属する。内容の検討を通じて、福田本のそれ（素堂自筆）は画卷成立以後の執筆、三康本のそれ（他筆）は貞享二年四月の芭蕉江戸帰還から間もない頃の執筆だったことを推測する。

従来の研究の根底には、『野ざらし紀行』画卷は芭蕉の主導によって制作されたとする見方があった。しかし、当時の状況を踏まえると、絵画の得意な門人・濁子^{じよこ}（中川氏、大垣藩江戸詰留守居役）が画卷制作を提案して下書きを芭蕉に依頼、それに応じて芭蕉が福田本を制作し、濁子が精彩を加えながら絵を模写して三康本が成ったと見られる（ただし本文は他筆）。それにまた、両画卷の成立を元禄六年頃と見ると『おくのほそ道』の編集時期と非常に近接していたことになり、二つの紀行の連続性ないし相互関係があらためて注目される。

素龍関連の『奥の細道』写本をめぐって

中部大学 岡 本 聡

このほど素龍に関連する『奥の細道』の写本を入手した。本書には、西村本、柿衛本及び明和寛政の版本のみが有する素龍の「元禄七年初夏」の跋文の原型とも考えられる跋文が「元禄七年初春」の年記とともに記されている。また、曾良本の表記を一部残しながらも、半分は既に西村本と重なる表記が確認出来、更に一部に柿衛本とも重なる表記が散見される。本文には素龍清書本からの誤記とも考えられる箇所が見受けられる。

本書は「桜より松は二木を三月越し」句までの本文の書写と、それ以後の句のみの抜粋、素龍の跋文から成る墨付十丁半の仮綴じ半紙本である。本書の存在は、自筆本の成立を元禄六年四月下旬とする上野洋三氏の説とも、元禄六年初秋の盆過ぎから初冬（十月初旬）にかけてとする今栄蔵氏の説とも矛盾しない。元禄六年十月初旬から十二月末頃までに補訂書き入れが行われた曾良本は、その後素龍に手渡され、第一次素龍清書本が元禄七年初春までに成立していたものと類推される。すると二月下旬頃、芭蕉が依水に見せたと想定されるものは、従来言われていた自筆本ではなく、本書の元である第一次素龍清書本だった可能性も指摘出来る。その後、元禄七年初夏（四月末頃）に第二次素龍清書本とも言える西村本が作成された後、芭蕉は五月

十一日にその西村本を携えて最後の旅である関西に旅立った。本書の出現で、西村本作成前の段階の空白を補う事が出来、その成立過程の一端を窺い知る事が出来るものと考えられる。

『猿蓑』発句部の再検討

和洋女子大学 佐 藤 勝 明

芭蕉が監修役となった去来・凡兆編『猿蓑』（元禄四年刊）は、「俳諧の古今集」とも呼ばれて評価が高い。その所以を知ろうと、発句部の読解を続けて見えてきたのは、配列が本書の達成を支える鍵だということ。李由・許六編『宇陀法師』（元禄十五年刊）「俳諧撰集法」の「当時俳諧の集、前後のつゞき肝要也」「集は第一もやう也」といった記述も想起されるところで、本書はまさしく「つゞき」による「もやう」を重視した撰集であると実感する。ところが、『俳文学大辞典』等を広く見わたしても、この点を指摘したものはほぼ皆無と言ってよい。

そこで、本発表では具体的に数箇所の句群を取り上げ、その「つゞき」による「もやう」を読み解くことで、従来の『猿蓑』観に不足がある（すなわち、発句部の醍醐味は配列の妙にあると言及すべきである）ことを指摘する。ことに、冬・秋の部には「さび」の美が託され、春・夏の部には「かるみ」の萌芽が見られ、『猿蓑』発句部の本領は前者にあるのだとする、半ば

定説化した把握（島津忠夫『猿蓑』の一考察）等）にも、この作業を通して疑念が生じてきた。季節によって詠み方は異なるという見解（『三体和歌』等）や元禄三・四年の芭蕉書簡などを援用し、芭蕉らが本書の冬・秋に重きを置いて「さび」を打ち出したとは言えないことを明示しつつ、そもそも定義の曖昧な術語（ことに「かるみ」）を当てはめる読み方からは離れ、『猿蓑』をそのまま一書として読むべきことを提唱する。

シンポジウム要旨

大田南畝の没後二百年を記念して、大田南畝を語るというテーマでシンポジウムを開催する。

大田南畝は覃、直次郎、四方赤良、蜀山人、杏花園、寢惚先生の名で語り語られた人物である。平賀源内は「嗚呼、寢惚子か。始めてともに戯家を言ふべきのみ。語に曰く、馬鹿孤ならず、必ず隣あり。目の寄るところ晴が寄ると」と語り（『寢惚先生文集』序）、上田秋成は「知己と云ふは必ずよく文を弄ぶ人にあらず。文の意を知りて問ひかわす人なり。東都に南畝子といふ人あり、我を知る人なり」と語り（『胆大小心録』）、永井荷風は「独り南畝の声名に至つては、江戸の學術風流俱に齊しく蕩然たらんとするの今日、依然としてその生前に異るところなし」と語り（『葦齋漫筆』）、石川淳は「天明狂歌に於ける蜀山の位置は、元禄の俳諧に於ける芭蕉のそれに当り、また、萬歳狂歌集の撰者たるかれの位置は、古今集の撰者たる貫之のそれに当る」と語った（『江戸人の発想法について』）。

本シンポジウムでは、第1部で幕臣としての南畝と文事、日常、周囲の人々との交流について論じ、第2部で従来説かれることがなかった視点として、上方から見た南畝という逆照射、石川淳の言説ではなく作品の中に見える南畝の影を捉える試みなどを通して、さまざまな視点から南畝を語りたい。

またシンポジウムに続く討論では、特定領域や時代にこだわらず、自由に多方面からの南畝を語る声を期待する。

〈第1部〉

寛政十一年の幕臣文化圏の一員としての大田南畝

——附・『ひともと草』伝未詳作者考——

広島大学 久保田 啓 一

寛政十一年（二七九九）正月二十七日、大田南畝は孝行奇特者取調御用方への出役を拝命し、後に『孝義録』として結実する「孝行奇特者」の伝記執筆を文筆活動の中心に置くこととなった。その作業の合間に、伝記の文体の書き分けを「宛丘伝」で試みたり、和文の会を開催して諸家の和文を取り纏め、後に『ひともと草』として纏めたりと、公務に関わる文事を意欲的に展開したことはよく知られている。

今回の発表では、『ひともと草』に収録される諸編の作者の中で「伝未詳」とされてきた、藤はらの安民、元如、守正、平の信行、上條八太郎の素性の考証を試み、彼らが幕臣としてどのように文事に携わったかを検証したうえで、南畝が彼らに和文の会への参加を慫慂した必然性を推測する。その作業を通して、南畝を当時の幕臣文化圏のなかに正當に位置付けるための見通しを立てたい。

旗本文人の領域——寛政二年の大田南畝

成城大学 宮 崎 修 多

江戸中期以後の幕府旗本の中には、いわゆるディレッタントの域を超える文事の才を発揮した人物が多く居た。その中で鈴木松之助善政なる知られざる人物と大田南畝との交流をここでは取り上げる。鈴木は小納戸七百石の布衣で文化六年に没するが、一歳年下の南畝とは安永期から没年まで、その日常的な親しさに変化はなかった。芙蓉館と称する鈴木邸では井上金峨、大田錦城など折衷学者らとの面識を得るが、それ以上に、ここでの詩会において白居易をはじめ宋詩、清詩など、古文辞派ではあまり推奨されなかった詩人たちの詠を議論したことが注目値する。その事の南畝詩への影響、さらにはそうした文学的な拡張りを演出した旗本文人の役割を考え、議論の端緒としたい。

〈第2部〉

上方から見た大田南畝

日本女子大学 福田 安 典

享和元年から二年にかけて大田南畝は大坂にいて、上田秋成や木村兼葭堂らと交流を持ったことは知られている。蜀山人の名乗りにも住友銅山との関わりが説かれることが多い。在阪時

代の南畝については名所観光や交遊などの観点から論じられてきたが、江戸っ子であったために浜田義一郎の「彼にとつて大阪の人情風俗は快いものではなかつた」に代表されるような評価もある。ところが大阪側から南畝を見ると、秋成が「長崎役にて二度出たれし時も大坂に在てたいめす。旅館は幕をはらせ、台ちやうちん二基、おめみへ以上の格とぞ」(『胆大小心録』)と語るような憧憬で見られる側面があつた。そこで本シンポジウムでは、南畝の見た上方ではなく、上方から見た南畝という視点から大坂を中心に整理して、この問題に、田宮仲宣、荒井鳴門、大坂で売り出された蜀山人煎餅、平野狂歌壇、鳴門の門下生の大塩正路の南畝思慕などを取り上げて再検討する。

石川淳の「おとしばなし」と南畝の戯作

立正大学(非) 宮内淳子

戦後すぐに石川淳は「焼跡のイエス」(一九四六)のような、当時の風俗に聖書のイメージを重ねて混沌からの出発を示す代表作を生んだ。「おとしばなし」シリーズ(一九五〇年前後)も同時代の中に李白、列子、管仲、清盛らを置くという手法を見せているが、笑いの中に同時代への批判意識はあるものの、向う先はオチであり、読ませどころは詩聖や歴史上の偉人らが俗世間に遊ぶさまにある。この「焼跡のイエス」と「おとしば

なし」シリーズとの違いは、南畝が漢詩文と戯作の書き分けに見せたあり方に重ねられないだろうか。石川の南畝への傾倒について、天明期の狂歌に関しては存分に語られて来た。ここでは南畝の戯作、特に黄表紙、咄本からの影響について考えてみたい。

会場案内図



会場へのアクセス

